

何時の事だったか、私は疲れた身を柱に凭せながら、薄れゆく夕日を茫然ながめて居た時だった。遊び飽きた數枝さんは讚美歌を歌って居たが、何時の間にか、私の膝に凭れて心地よげに眠ってしまった。

私はゆれ起すのも可哀想になつて、足の萎れるのも知らずに數枝さんの寝顔に見とれて居た事がある。

數枝さんが五年の時だったと記憶して居る、數枝さんの一家は突然U町へ轉居してしまつた。それは數枝さんの父さんが轉任になつたからである。

私も在勤六年にしてK町を去つたので、何時とはなくその消息は互に絶えてしまつた。

數枝さんにもう相當の年輩だ。今も尚ほ好きな音楽の道にいそしんで居る事だらう。だが母

つて居る。見ると右手に五萬分の一の地圖を

持つて居る。

「ヤア！ 歩いて来たのか」

「ハッ、地圖を見る事は私達の職務なので研

究し乍ら參つたのであります。」

炎熱の候にもかくはらず、軍服のボタン一つ

外さず、あの軍隊的口調で、ゴツリゴツリ語

るのであつた。

むさ苦しいが私は寓居に案内して、昔の物語

りに蚊遣火の夜を更かした。

岡野の家は、吉田先生と同じく、元は忍藩の

士族であつた。が久しい以前からK町へ来て

商賣をしてゐる。岡野の兄は千島の方から、

カムチャツカ方面へ探險隊に加つて行つた

が、そのまゝ行衛不明になつたのだといふ事

を聞いて居た。

として、妻として暖い家庭の人となつて居るかも知れぬ。が呉々も現今流行のモダンガールの仲間に入つて天眞の美を汚すことなからん事を祈る、そして貞淑なる妻として、慈愛ある母として、昔に變らぬ純なる聖き生活を送るやうに、昔の教師は衷心から神に祈るのである。

私がK町を去つてからの事だ。後日譚とも云ふべきが至當かも知れぬが、私は矢張りここに挿話として附記して置きたい。

七月下旬の暑い日であつた。

一人の青年將校が、私の校舎へ訪れて私に面會を求めた。玄關に出て見ると、それは教へ子の岡野だ。當年紅顔の少年は堂々たる帝國の干城となつて、軍服委凛々しく私の前に立

小學校時代の岡野は活潑な少年であつた。しかも學術の成績も優等で常に首席を占めて居た。が兄の事を語ると悄然として思に耽るのが常であつた。少年の心の底には敵愾の氣が燃えて居たのであつた。押川春浪や江見水陸などの武勇小説を、貧しい私の書棚から、さがし出しては耽讀した。その時分から軍人になりたいたい志望を抱いて居た。

私の寮舎へ来てボーイの様になつて、よく使などをして呉れた。

小學を卒へ中學へ入學したが、中學二年か、三年の時であつた。

K町へ〇〇少佐といふ簡閱點呼執行官が來た時、役場の吏員が岡野の事を話した。少佐は岡野の兄の話などを耳を傾けて聽いて居たが「その少年に會つて見たい。」